

林 富美子
野に咲くベロニカ



カニロく咲く野

子美富 林



小峯書店

野に咲くペロニカ

定価一五〇〇円

昭和五十六年十月三十一日 第一刷発行
昭和五十七年二月二十日 第三刷発行

©

著者 林 富美子

発行者 小 峯 光 一

発行所(株)小 峯 書 店

〒一〇一東京都千代田区神田神保町一ノ三九

印	検
止	廃

電話(〇三一二九四)三七七四代

振替東京3 七四三七八

印刷者 渡 部 栄

印刷所 (有)秀和印刷

製本所 (有)昭栄堂製本

落丁・乱丁本はおとりかえします

はじめに

今から半世紀前の日本には、社会の不当な偏見思想のために迫害を受けたハンセン氏病（癩）患者が、人の目を覆わしめるような姿で巷を歩いていた。それは信じられない事実である。現在の日本ではもうこの病気に罹患する人はきわめて稀なことで、特に少年期の発病はここ十年近くも前からゼロとなった。このようになった陰には、日本近代の救癩事業という、輝かしい不滅の歴史がかくされていることを忘れることは出来ない。

明治初年に宣教のために来日したバリー・ミッシェン会の神父テストウィード師は、まず御殿場に小規模ながら癩病院を創立した。現在の復生病院である。この国境をこえたキリスト教的人類愛は政府を動かし、皇室を動かし、社会を動かしたのであった。私立復生病院創立から二十年おくれて、明治四十二年に公立の癩病院が五か所に出来た。そして「救癩の父」と言われた光田健輔院長を主軸とした、キリストの愛に燃える医療団が組織されたのである。富士山麓から流れ出した救癩の小さな谷川は、大正、昭和にかけて光田先生を中心にして激流となって流れ出し、

二千年來の國の悩みに解決の光を与えたのである。

私がこの群れの中に加えられた時はまだうら若い女医であつた。ひと掬いすくの水を汲くむほどの能力もなく、ただおろおろと、病友の苦しみを共に負いたいというあせりばかりで過ぎてしまつた。大正、昭和にかけての、この輝かしい救難史の岸辺に立つて、病友と一緒に花を摘んだり、空の鳥と遊んだりという記憶しかない。昔の病友にすすめられて筆をとりはじめたが、救難の原点ともいふべき光田イズムの核心にふれえなかつたことをお詫びしたい。私は七十四歳まで生き長らえた。光田先生の下で働いた同志達は、凡てすでにこの世にはいない。ただこの人達の名前だけでも、この書の中で記録いたし、私の心のメモリアルとしたいと思ひながら、書き綴つたにすぎない。

この書のために、いつも温い励ましをいただいた病友伊郷芳紀兄、松村好之兄に御礼を申し上げます。また小峯書店の御夫妻、ことに節子夫人の心あたたまるお言葉は、どんなに沈み勝ちになる私の筆を立たしめたであろうか。十字の園の看護婦、土田セイ様は私の好きなベロニカの花を画してくれた。みんなキリストのおん血につながる方ばかりである。

一九八一年（昭和56年）初秋

富士山麓にて 林 富美子

野に咲くペロニカ

目次

はじめに

野に咲くペロニカ …… 1

ペロニカの花

幼い日々の回想 …… 9

水年貢

大家族の人々

兄弟

学問は父の悲願

遠い記憶 …… 23

入信と一枚の写真

救済事業への誘い

父母との決別

賛育会錦糸堀病院

砂町診療所と斑紋癩の老人

全生病院 …… 43

良き師良き友

ある少女の死と僻地の医療

秋晴れの青梅街道を行く

国立長島愛生園の開園

長島愛生園 …… 59

長島の日々

思い出に残る病友達

はじめての検診旅行と頬白

星塚敬愛園の誕生

結婚話

小川正子先生との別離

離島の癩と青木恵哉兄との出会い …… 89

新婚旅行

離島の癩と敬愛園

ひとり旅

名護の第一夜

青木恵哉兄との出会い

本部半島を巡回する

再び屋我地大堂原へ

残彼岬の夕雲

星塚敬愛園 …… 123

聴診器を捨てる

沖繩の回想

松田ナミ先生と愛楽園

子供のいなくなった村

母となる

小児病のモデル児

あわただしかった昭和十四年

義父竹治郎の死と孫達

文雄の発病と大島青松園への転任

大島青松園 …… 161

島の分教場

終戦

文雄の死

改宗と島の日曜学校

道子の病氣と大島青松園退職

新しい生活 …… 189

復生病院

基地の中学校

村の診療所（聖マリア診療所）

服部けさ子先生の日記

赤犬ブラウンの死

大坂夜間診療所と売春婦宿

わすれな草 …… 221

この川の芹あゝ土手のわすれな草

林文雄記念館と札幌の旅

母の死

特別養護老人ホーム十字の園

韓国救癩とJLM

あとがき

著者略歴

明治四十年 香川県琴平町に生まれる。

大正十三年 丸亀高等女学校を卒業。

昭和四年 東京女子医学専門学校を卒業。

昭和五年 東京都下東村山、国立癩療養所多摩全生園の医師となる。

昭和七年 岡山県国立癩療養所愛生園の医師に任命される。

昭和十一年 林文雄（鹿児島県国立敬愛園長）と結婚。二児の母。

昭和十九年 香川県、国立大島青松園に勤務。

昭和二十六年 静岡県御殿場市、私立癩院復生病院に勤務。

昭和四十六年 全市特別養護老人ホーム十字の園の医師となり、今日にいたる。

昭和四十七年 日本女医会より、吉岡弥生賞を受ける。

野に咲くペロニカ

ペロニカの花

五十年近い医療生活のうち、その四十年を、私は癩を病む病友達と共に過ごした。今またねたきり老人のベッドの脇に、十年この方私を立たしめたものは、彼らが、身近にキリストを感じさせる存在だったからに外ならない。極限の世界に生きる人間像を、間近に見るといふ特殊な境涯を私は生きてきた。

嗚咽と慟哭、呻吟と苦悩の闇の中で、「石を起してアブラハムの子らとなし給う神」は、彼らを抱き起こして、神御自らがその栄光をうけられ給うのを見せてくださった。

幼くして癩にかかった少年Tが、父親に連れられて入院して来た。東京のW中学の真新しい制服が、一層悲しい印象を与えた。彼は次第に重症となり、闘病二十年の末、一冊の詩集を残して天に召された。その一つにこういう詩があった。

わたしの存在がいかに小さくとも

凡てであつて一つである御者おかたのために

ムダでなかったとの証言を

人類の歴史に刻まれてゆくという約束を

ただこのわたしを

忠実に見守ることで示したい

(一九五六・五・一九)

彼は、絶望の墓から、主の声を聞いて出て来たラザロのように、暗い癪院の中で、自ら光を放つ深海の魚族のように、キリストの光を受けて、神に生かされて歩いていった。彼が生きたその姿は、まさに美しい神の生ける証しであつた。このような病友達の多くを思い起こすことは、また私にとつても神の御栄光を偲ぶことなのである。

ここ御殿場近在では、きびしい冬の終わりに、ペロニカという空色の星のように小さい花をよくみかける。和名では「いぬふぐり」と言うが、復活祭をひかえた頃、枯芝の中ではえつくばうように咲くこの花は、ペロニカと呼ぶほうがふさわしいように思えてならない。帰化植物で、フ

ランス辺りでは、もっと草丈が長いのだと、復生病院の老神父はおっしゃった。P・ベルトの『キリスト伝』によると、ペロニカと言う婦人がいて、キリストが、十字架をかついでゴルゴタの丘にひかれて行くあの坂道で、いたましく変わり果てた御顔の血と汗を、かけ寄って拭いて差し上げた女性として描かれている。そのかぶり布を家にもどってひろげたら、そこには、はつきりとキリストの御顔が写し出されていたと言うのである。ルオーの画くペロニカの手巾は有名であるし、遠藤周作氏の作品、『聖書の中の女性たち』の中にもペロニカが出てくる。これらのペロニカは、ベタニア村のマルタであろうとか、血ろろを病む女ではなからうかととりざたされているが、それは誰であろうとよいことであって、御主キリストのみ顔の汗を、拭い奉ることはたとえ出来なくとも、苦悩の闇で嗚咽する癩の病友のために働いた、数多くの看護婦達もまた、ペロニカに外ならないと思えるのである。

死を目前にした病友が、季節はずれの西瓜を欲しがるので、自分のポケットマネーで新宿まで買いに出かけた全生園の作田ツネ看護婦は、帰ってみたら、その病友はすでに死んでいた。彼女は西瓜を病室の床において、泣きくずれたというが、このペロニカの花の咲く頃に、いつも思いつく人である。昭和十年、離島の病友を乗せた輸送船が、七島灘の荒れ狂う波にはんろうされて、長い航海となったあの時、船のマストに自分の体をロープでつなぎつけて、波しぶきの中

を、病友の尿尿を海に投げ捨てながら、鹿児島港に無事に病友を連れもどった、あの勇敢な前田コト婦長もまた、ゴルゴタの丘にさしかかった時、再度倒れなされた主イエスをみて、通路を見張る兵士達にはとん着せずに、走り出して行った女、ペロニカの勇氣に似ているようにも思うのである。

昭和七年十一月、私立明石癪院が閉鎖された時、多くの癪の青少年を、母のようにかばいながら、国立癪病院の愛生園に移住して来た、あの大野悦子女史は、青年達の凡てを愛生園の職員にまかせて、自分はひそかに愛生園附属の保育所の保母になられた。そこには癪者を母にもつ沢山の幼児が、病気の親から離されて育てられていた。そこで、十歳も年下の主任保母の下に、命令されるままに、女中のように立ち働いていられた美しい大野悦子女史。私は愛生園の医局への出勤の行き帰り、保育所の子供の顔を見るために立ち寄るのであるが、いつも、つつましく、ひそやかに子供らのおむつに明け暮れていた彼女を見た。

かつては明石病院を背負って来られた偉大な女史が、ここでははいつくばうように汚れものの洗濯をしていられるのである。私には、あの美しい大野悦子女史の顔が、ペロニカという女性と重なり合っているように思ひ出されてならない。

癪と言う重い十字架を背負いながら、あえぎあえぎ死んで行った病友のかたわらには、どこで

もどの時代にも、ペロニカという女性はいたのである。春早く、復活祭も間近い野の途で、私はこの空色の星のような花に出会うことをこの上もなくたのしみに行っている。

今年も村の教会のミサにあずかり、午後は駿河国立病院内の復活祭に参加したが、聖堂の一隅に、数名の盲目の癩女がひとかたまりになって座っていた。そのあたりから一きわ美しい、祈りと讃美の音が聞こえてくるので気づいたのである。白いベールに覆われた癩女達の顔はさだかはなかったが、私はひどく心をうたれて絶え間なく涙が伝わり落ちてくるのをどうすることもできなかった。

ここにもペロニカはいたのである。イエス・キリストの御傷の痛みは、彼女達の祈りと讃美でどんなに和らげられたことであろうか……。

現代、世界人類の神への忘恩の罪は、償うべくもないが、こうして、病める彼女達の祈りの声を聞いていると、これこそ、忘恩の罪を償う声であると思えたのである。ペロニカはここにもいたのである。

空色のペロニカの花咲きこぼる

復活祭のミサの途かも

